

「青木理が語る～戦争しない国であり続けるために」

今秋スタートした新

日本国憲法公布 79 周年記念 2025 ぎふ平和のつどい 11 月 3 日 (月)
ぎふしんフォーラム (岐阜市民会館) 大ホール

2025 平和の

実行委員会が質問を用意し
青木氏がそれに答える形で
平和のつどいが始まりました。



「青木理が語る
戦争をしない国で
あり続けるために」

青木理さん
(ジャーナリスト)

一大垣市にいらっしゃったのですか？

青木：最初に書いた本(『日本の公安警察』講談社現代新書)で取材をしてたんです。大垣で僕には見逃せない事件があって。風力発電の建設計画があり、地元の方々にしてみれば、環境問題や、生活に影響する問題があります。計画が進められている近くの住民の方々が、勉強会を開かれた。当時、大垣署の警備官(公安警察の組織)たちが勉強会に出席した人たちのプライバシーを調べ、“この人は危険だ、こんな経歴だ”なんてことを調べ、風力発電の建設を担っ

ている会社にこの情報を伝えた。しかも「このような人たちが反対運動を広げていくと、本社の事業が進みませんよ、気をつけなさい、警察も協力しますから」と。これは朝日新聞のスクープです。住民の方々は国家賠償制度訴訟を起こし、それが一審(岐阜地裁)と二審(名古屋高裁)で画期的な判決が出た。一審の判決は「保安警察の情報収集活動をしたことは警察の職務として行政範囲内。けれど、職務として集めた情報を一企業に渡したことは違法である」という判決。名古屋高裁の判決はさらに進んで、「市民運動、住民運動を危険視してこのようなことを調べること自体おかしい」という判決でした。

一声をあげることで、気づくこともありますね。

青木：そうなんです。たとえば、警察が情報収集していたら、その運動自体がちょっと危ないとか、運動そのものが危険だと思われて控えてしまう。まさに、言論、表現、あるいは思想信条とか、政治活動の自由さが完全に減らされてしまう。あのような判決を勝ち取った地元の住民の方々には本当に敬意を表したいなと思います。

実行委員会：そういうことで、岐阜と関わられていらしたんですね。

高市政権について

一さて、この秋に高市新政権が成立しました。この政権について、まずご意見をいただきたい。

青木：戦後 80 年、いわゆる憲政史上初の女性総理大臣が誕生した。僕は『安倍三代』という本を書いたのですが、それは安倍晋三さんの世襲人生の物語です。少なくとも高市早苗さんは世襲ではないし、女性の政権誕生はすごく大きな意味があると思っています。一方で、みなさんと同じようにずいぶん右に偏っちゃったな、という懸念はあります。

高市さんは「スパイ防止法」、「情報機関を作る」とかなり強くおっしゃってます。自維連立で、政策協定の中に「スパイ防止法の制定」、「情報機関の創設」が入っています。魑魅魍魎とした国際情勢の中で、日本の外交や安全保障、情報機関が情報を取ることも必要だと思われる方もいると思いますが、僕のように治安機関や、治安法、情報機関を取材してきた人間に言わせ

ればきわめて危うい。その辺り、高市さんはじめ為政者の方々も分かっているのかなあと。それがすごく不安ですね。

治安機関とか、治安法は、政治体制の右とか左を問わず各国は持っている。ただ、これが強ければ強いほど社会がどうなるのか。これはもう歴史が教える所でもあるわけです。

戦前戦中、軍とか警察の情報機関や治安機関が、ある意味ファッショ体制で、憲兵が政治活動をする者を徹底的に弾圧するような組織と化した。治安維持法もそうです。国体を変革するような共産主義者を取り締まるために作られた。そのうちどんどん拡大解釈され、共産主義の同調者、協力者、果ては労働運動とか、さらに文学、政治活動まで拡大され、片っ端から捕まえたわけです。これは日本だけではない。情報機関とか治安機関というのは、妙に力を持っている。そういう危うさみたいなモノを、今の政治家は持っているのか。ぼくは持っているようには思えないんですね。

戦争体験のある政治家

後藤田正治さんという政治家がいた。彼は総務省(当時は内務省)と警察庁と厚生労働省を合体したくらい、まさにゆりかごから墓場までという、絶大な力を持った役職です。戦後は警察庁で警備局長(公安警察の親玉)それから警察庁長官、その後中曽根政権で政界に転じ、官房長官に。彼は戦争体験があったからでしょう、晩年は鳩派的な発言で、「自衛隊が海外に行くことは断固として反対する」という立場を取られた。先の大戦の反省と教訓をかみしめながら、日本が同じような道を再び歩かないようにという思いを同時に持っていたんですね。2004 年の朝日新聞「情報機関が必要ですか?」というインタビュー記事内で、彼は「平和国家として生きていく上で、海外も国内も総合的な情報をとるウサギの長い耳は、必要だと思う」と答えた。続けて「ただ、下手をすると両刃の刃になる、今の政治・政権がこれをちゃんとコントロールできるのかと考えると、ボクは迷うんだよね」とおっしゃった。後藤田さんは「情報機関は必要である」といいながら、「社会やメディアがきちんと干渉することも含めて、情報機関は、民主的に政治がコントロールしないと、あっという間に暴走して手が着けられなくなる」と。ただやっぱり迷いがあるんです。その迷っているのが、僕はものすごく大事だっと思うんです。今の高市さんとか、野党も含めて、本当にコントロールできますかね。あぶないですよ、と言える人が少ないというあたりが一番の懸念です。

戦争しない国であり続けるために

これってまさに今日のテーマ「戦争をしない国であり続けるために」ということと、表裏一体ですね。つまり、ロシアのウ

政権について



かということ、戦争である。あるいは非常に薄暗い社会、というような気がしてしょうがないんです。

高い支持率のなぞ・・・

一はい、危険な高市政権ですけど、今日のニュースでも、80%以上の支持率があるんですがそれはなぜでしょう？

青木：僕も聞きたいです。女性がはじめて内閣総理大臣になったという鮮烈さ、もう一つは期待感。先の参議院選挙が終わって以降、石破さんが降りたら高市さん！？みたいな驚き。そういう意味で言えば80%とかいう支持率をどう捉えるかボク自身もまだ咀嚼もできてない。

選挙に負けた最大の理由は「政治と金」の問題と、安部派を中心とした複数の自民党派閥の裏金問題。それからもう一つ、今取材している山上徹也被告の事件につながった旧統一協会。自民党との蜜月問題ですね。政治というより自民党に対する強烈な不信感が選挙で敗北につながった。結果として、石破さんは、「責任取れ」と言われて引きずり下ろされた。そして選挙の結果、高市さんが総裁になった。だけど、所信表明演説には政治と金のことなんて1つも書いてないですよ。この間、いろんな外交もありました。トランプさんの前でびよんびよん跳びはねて、見るに堪えないなあと。

ただ例えば中国、韓国に対しても、実用主義、原理主義でいこうと、非常に常識的な線を打ち出すんじゃないか、これに関しては、まあひと安心というところでしょうか。しかし最大の問題「政治と金」の問題も旧統一協会の問題も、どっかに行っちゃった。かつ、その裏金議員、さすがに大臣にはできなかったけど、事実上、与党の執行部の一番実権を握っているのは、萩生田さんですよ。だから、副大臣とか政務官とかみんな裏金議員が続々と入っているわけですね。高市さんになったから、80%というのはですね、ほんとどうなんですかねえ。

台湾有事は、あり得るのか

一日本の民主主義が崩れていくような感じですが、軍備費を拡大し、南西諸島に莫大な軍事基地を建設している。台湾有事っていうのは、あり得るのか？軍事費を拡大することによって、抑止力によって、本当に安全が守れるのかお聞きしたい。

青木：台湾有事が起きるかというより、本当に起きたらどうなるのか、想像力を働かすことが重要だと思います。本来は、為政者・政治家の最大の仕事は「戦争を起こさないこと」。これだけ日米の軍事一体化が進み、安全保障路線もできましたから、台湾有事が起きたら、自衛隊は米軍の2軍として駆り出されて



青木理（あおきおさむ）1966年生まれ。フリーのジャーナリスト、ノンフィクション作家。「サンデーモーニング」コメンテーター。著書に『時代の反逆者たち』『安倍三代』『日本会議の正体』など多数。

いくことは間違いないですよ。

台湾有事っていうのは、覇権国、あるいは軍事大国として野望をいだいている中国とアメリカがガチンコでぶつかるってことですよね。もしぶつかったら、核戦争で地球が破滅してしまう。先般韓国でAPECがあり、米中首脳会談があり、日米首脳会談があり、米韓首脳会談があり、日本での日韓首脳会談でも高市さん、あんなにはしゃいで、ここまで媚びなくちゃいけないのか、防衛費の倍増を前倒して、80兆円を投資するとかいって・・・。

外交が重要な役割を果たす

習近平さんとトランプさんの会談は唯一の外交だったと思うんです。中国は「レアアースを輸出しないぞ」とカードを切った。トランプさんはそれは困ると、習近平さんにいろいろ話をした。その結果、「レアアースは輸出規制を解除」することで納得。その代わり中国は「関税は10%まで下げて」と交渉した。これってまさに外交ですよ。唯一の外交が米中首脳会談という気がします。中国とアメリカは、お互いの国はなくては生きていけないような状況になっているんです。

逆にいえば台湾有事が起きたら、世界経済がめちゃくちゃになります。食糧自給率が低い日本、カロリーベースで37%です。台湾有事が起きたら、中国、あるいは中国周辺からおそらく食糧が入ってこない。そうなったら戦争する以前にたぶん飢えて死にますよね。

一今のお話で、戦争しない国であり続けるために、やはり「話し合い」をしていかなきゃと思いますね。

青木：各地にあるこの九条の会とか、それぞれの立場で、やるべきこととか違うんですが、でも、ほんとうに憂鬱というか状況はどんどん悪化しているんじゃないかな、世界的にも国内的にも・・・。

新しい戦前とならないために

平野啓一郎という作家と話をしたときに、「青木さん、我々の世代は、ひょっとすると“恥の世代”として、後世に記憶されるかもしれません。つまり、失われた何十年という経済、あるタレントが“新しい戦前”といいましたが、僕らのような作家や、ジャーナリストとかが特に「何したんだ」と後世から問いただされるようになる。そういう時代に僕らは生きているんじゃないかな」って。必死に抗うしかないですし、「九条の会」の方々、あるいは市民団体とかが無力に思われるようなことがあったとしても、そういう抗う力が息づいている社会がなくなったら、その時がまさに戦争とか、暗い社会の入り口になっているんだろうと思いますね。

みなさんもそれぞれの形で、運動したり、あるいはおっしゃりたいことをおっしゃったりして、がんばっていきましょう。

文責：にらめっこ